

公開講演会要旨

研究所20年のあゆみ 本年1972年は、当研究所が1952年4月に、定員15名で発足して以来20周年にあたる。そこで、過去20年間の研究業績の主なものを、スライドで紹介しながらふりかえった。
(坪井清足)

平城宮内裏について 平城宮跡の中心部分を占める朱雀門内部分と、中壬生門内の部分とは、それぞれ第1次朝堂院一大極殿一内裏、第2次朝堂院一大極殿一内裏と推定してきた。両地域の内裏相当部分の調査が進行し、推定第2次内裏部分では日常生活の空間が、推定第1次内裏部分では儀場的な性格が判明した。さらに、両者は併行して存在していることも確認された。このことから、推定第2次内裏部分を天皇の起居する内裏、推定第1次内裏部分を天皇が臣下と宴会などを催す儀場としての中宮に推測する。しかし、他の大極殿、朝堂院などの部分について比較する調査が望まれる。
(町田 章)

歴史的都市環境の保存再開発 個々の建築でなく建築を群として、周辺の環境をもふくめて保存しようという動きが全国で起きている。歴史的な町並みや集落を保存し、そこに新しい生命を与えようとするもので、現在、金沢・高山・倉敷・萩・妻籠・京都などで条例や憲章をつくって実施しつつある。本研究所では今井町（奈良県橿原市）で町並みの調査を数年来実施しているが、今井町の調査研究のために上記の都市の資料を集め参考にする必要が生じた。今回、これらの資料を紹介した。町並みや集落など歴史的な環境を保存することは、個々の建築を保存する場合と異なり、単に文化財の建築としての問題ばかりでなく、都市の問題が大きくもちあがる。住民の強い保存への意志があるところで成功しているというのが現状である。
(宮沢智士)

飛鳥藤原の調査 飛鳥藤原地方で、1972年度に発掘調査をおこなったのは、飛鳥浄御原宮推定地・藤原宮の宮跡と、坂田寺・奥山久米寺の寺院跡および上ノ井手遺跡（飛鳥資料館建設地）の計5ヶ所である。これらについて、その調査成果を報告した。詳細は本文38～47ページ参照。
(猪熊兼勝)

奈良時代の官瓦窯 平城京の北方に連なる奈良山丘陵には、平城宮所用瓦を焼いた官窯が点在することが知られている。これらのうち1972年度には、中山瓦窯・歌姫西瓦窯・押熊瓦窯の3ヶ所の瓦窯群を発掘調査した。同丘陵内で、以前に調査したその他の瓦窯の結果をも合わせ通観してみると、一つには、登窯から平窯へという窯体構造の変遷が、明確にたどれるようになってきた。さらに、出土瓦の型式分類からは、各瓦窯群の年代と、その生産活動の消長および造瓦集団の動向が把握されるようになってきた。詳細は本文30～35ページ参照。
(工楽善通)